



「野焼き」が始まると、春はもうすぐそこまで来ているよ！

3月頃に阿蘇でいっせいにやられる野焼き。炎が山肌を駆け上っていく様子は、とってもごうかいで迫力があるね。でも、油断すると、大火事になったり命を落としたりする、とても危険な作業だから、集落の人が総出で力をあわせてやるんだ。
野焼きは、草原を守るための大切な作業のひとつなんだよ。



枯れ草を焼くことで、草の芽吹きを助けるんだ。黒こげだった草原も、新芽の緑や咲きほころぶ花で、黄色やコバルト色になるんだよ。

まわりの森林に火が燃え移らないように、草を短く刈っておくんだ。これを「輪地切り(わちぎり)」というよ。

もうすごい！



雪の中の牛たち
阿蘇では、雪の中でも牛を放牧させる風景がみられる。風をさげ、寄り添って寒さをしのぐ。
冬期



アズマイチゲ
明るい林地を好み早春に地上に芽を出す。熊本県が、分布の南限にあたる。
2~4月



火振り神事(阿蘇市)
農作を祈って行われる神祇の結婚の儀式。火のついた、たいまつを振って炬神を迎える。
3月申の日



野焼き
この時期、草原のあちこちから野焼きの炎が燃え上がる。草原を守るために何百年も続けられてきたもの。
3月彼岸前後



芽生え
野焼き後の黒い山肌には、春を待っていた草の芽が次々と吹き出て春の訪れを告げる。
3月下旬~

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3 部分	4 立春
5	6	7	8	9	10	11 建国記念日
12	13	14	15	16	17	18
19 雨水	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

2006 **2**

阿蘇

草原再生

子供たちへ引き継ぐ千年の草原

先人たちがつくり
今日まで維持してきた阿蘇の草原を
変わらずに守っていこう

2006 **3**

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6 啓蒙	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20 社日	21 春分の日 部分、暮後岸	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2月の主な阿蘇の祭事と行事
★ 初午 立石稲荷神社初午祭 (南阿蘇村) ● 8日 計供養

3月の主な阿蘇の祭事と行事
★ 初午の日 穴迫稲荷神社祭 (高森町) ● 3日 雛祭り
★ 20日 火振り神事 (阿蘇市) ● 野焼き
★ 20~21日 藪の草の飜草つき (阿蘇市)

<ねらい>

阿蘇の草原では、春の彼岸を中心として一斉に「野焼き」が行われ、時には30mの火柱をあげ燃え盛る真っ赤な炎と、すさまじい煙が立ち上る光景があらわれます。そして、野焼きによって真っ黒になった山肌は、暖かさが増すにつれ、やがて一面緑色に染まり、黄色やコバルト色の花が咲きほころぶ穏やかな景色に様変わります。春を告げる風物詩として多くの観光客が訪れる野焼きですが、地元の人々が生命の危険を冒しながら従事している農業の営みにほかならないのです。

ではなぜ生命の危険を冒してまで野焼きが行われているのでしょうか、また、誰がどのようにして野焼きを行っているのでしょうか、実際に地元の人に話を聞いたり、野焼きの現場に足を運んだりしながら、野焼きへの理解を深めるとともに、その必要性を考えてみてください。

また、阿蘇には各所に「火」にまつわる伝統行事が残っていますので、子供たちと一緒に調べてみるのも良いでしょう。



こんな風に
やってみよう!!

1. どうやって草原が焼かれているのかを知る。**家や近所の人に、野焼きの作業について聞いてみよう。**

家

近所

通年

草原に火を入れるまでの準備作業（これについては秋から春までの簡単なスケジュールにまとめてもらうと、輪地切りから野焼きまでの流れが分かる）野焼きに使う道具、野焼きの手順（これについては草原の簡単な模式図に火をつける順番などを書き込むと、草原毎の作業手順があることが分かる）注意点、火のスピードや逃げ方などを聞いてみましょう。いかに野焼きが大変で危険を伴う作業なのかがわかるでしょう。

さらに 2～3月にかけて、自分の住んでいる集落が行っている野焼きの場所を見に行き、実際の作業の様子を観察することで、よりその大変さがわかります。ただし、野焼きは危険を伴うので、地元の人々の指示に従って、安全な場所で見学するよう心がけましょう。

さらに 家族や近所の人に、野焼きや野焼きの準備のための作業で、何が手伝えるか聞いてみよう。そして、できることがあれば草原の管理を手伝いましょう。

<web> 阿蘇どまんなか局 野焼き作業状況 <http://www.aso-domannaka.com/news/noyaki.html>

阿蘇風景写真館野焼き作業実況 <http://www.asophoto.com/nikki/noyaki/noyaki.htm>

阿蘇草原再生HP（環境省） <http://www.aso-sougen.com/now/now.html#03>

家や近所の人に、どこで誰が野焼きをしているのか聞いてみよう。

家

近所

通年

家や近所の人に、どこで誰が野焼きをしているのか聞いてみることで、草原に関わりのない人や阿蘇に住んでいない都市の人が、作業に参加していることなどがわかるでしょう。

さらに クラスのみんなで、聞いてきた結果を発表しあいましょう。野焼きをしている場所を地図に色を付けてみてその場所を比べると、住んでいる集落によって野焼きをする場所が違ってくるのがわかります。

<web> (財) グリーンストック 野焼きボランティア支援 <http://www.aso.ne.jp/~green-s/>
阿蘇くじゅう国立公園(環境省)
<http://www.sizenken.biodic.go.jp/park/np/asokujyu/topics/4/>

昔の野焼きの様子を聞こう。

家

近所

通年

おじいさんやおばあさんが若かった頃に行っていた野焼きの話聞くことで、野焼きのやり方も変わってきていることなどがわかるでしょう。

ヒント 植林がまだ進んでいなかった頃には、山火事になる危険性が低かったため、夜に火を放ってそれを見ながら酒を飲んでいたこともあるようです。

2. なぜ草原を焼いているのかを知る。

野焼きに参加している人に、なぜ野焼きをするのか聞いてみよう。

家

近所

通年

野焼きに参加している人に、なぜ野焼きをするのかについて聞いてみると、野焼きが農業を営む上で欠かせない作業であることが分かるでしょう。また、農業を営んでいない人(サラリーマンの世帯、野焼き支援ボランティアなど)に聞くと、草原を残していきたいという強い思いがあることも分かるでしょう。

<web> 阿蘇くじゅう国立公園(環境省)
<http://www.sizenken.biodic.go.jp/park/np/asokujyu/topics/4/>

野焼きをしている草原としていない草原を比べてみよう。

野外

4月

3月中旬頃、野焼きが行われている草原と、行われていない草原を記録しておいて、年度が明けた4～5月に、それぞれの場所に出かけてみましょう。草を観察して比べてみると、野焼きが行われた草原は草が青々と芽吹いているのに対し、野焼きが行われなかった草原は、春でも茶色っぽく丈の長い草が生えていることがわかります。野焼きによって、新しい草原が生まれることがわかります。

解 説

1. 野焼き

(1) 野焼きの目的

3月中旬、阿蘇で一斉に行われる野焼きは、草原を維持するための大切な作業のひとつです。野焼きは、次のような目的で行われています。

前年の枯れ草を焼却する。

草刈り時の妨げとなり、また草原から森林への遷移を進める原因となる、アキグミ、ノイバラ、ノリウツギといった低木類を抑圧する。

牛馬が好むネザサ、トダシバなど、地下茎が発達して火に強いイネ科の植物の比率を高め、草原を維持する。

つまり、野焼きをすることによって、新しい草の芽立ちを助け、牛馬の飼料などとして採草したり、放牧の場所などとして利用するための新鮮な草原を維持することができるのです。

このことは、草原に適応した希少植物の生存にとっても、大切な役割を担っています。草原が、藪になり林になれば、草原性の希少な植物は絶滅してしまうでしょう。また、野焼きによって毎年草原がよみがえるので、阿蘇の草原景観が維持され、阿蘇を訪れる多くの観光客の心を引きつけます。阿蘇の貴重な植物を絶滅から守り、日本を代表する景観を後世に残すためにも、今後も不可欠な作業であるといえます。

コラム 野焼き後の草原

野焼き後の山肌は真っ黒になるが、やがて、芽吹きが始まり、黄色のキスミレやコバルト色のハルリンドウなどの花が咲いて草原に春の訪れを告げます

野焼き直後の草原



春の草原



(2) 野焼きをする

1) 野焼きをする前に - 輪地切り・輪地焼き(夏から秋) -

「輪地切り」とは、野焼きを行う付近の山林や建物に火が移らないようにするための防火帯づくりのことです。この作業は、夏から秋にかけて行うもので、野焼きを安全に行う上で最も重要で、重労働の作業です。草原と森林などの境にある草を幅6～10mにわたって刈り払い機などで刈ります。その数日後に刈った草を焼いて、防火帯の完成となります。この作業は「輪地焼き」といいますが、周りの草原が枯れてから行うと引火しやすいので、まだ草が青い夏の終わりか秋の初めに行います。まだ残暑の厳しい折

輪地切り



なので、大変な作業です。

この輪地は、急斜面につくられることも多く、足場が不安定でベテランの人でも作業が難航することがよくあるそうです。阿蘇市郡における「輪地」の総延長は、610km（平成15年度牧野組合調査結果より）もあります。これは阿蘇から名古屋までの距離にあたります。この距離を毎年切っているのですから、驚きです。

2) 野焼きの日を決める（2月）

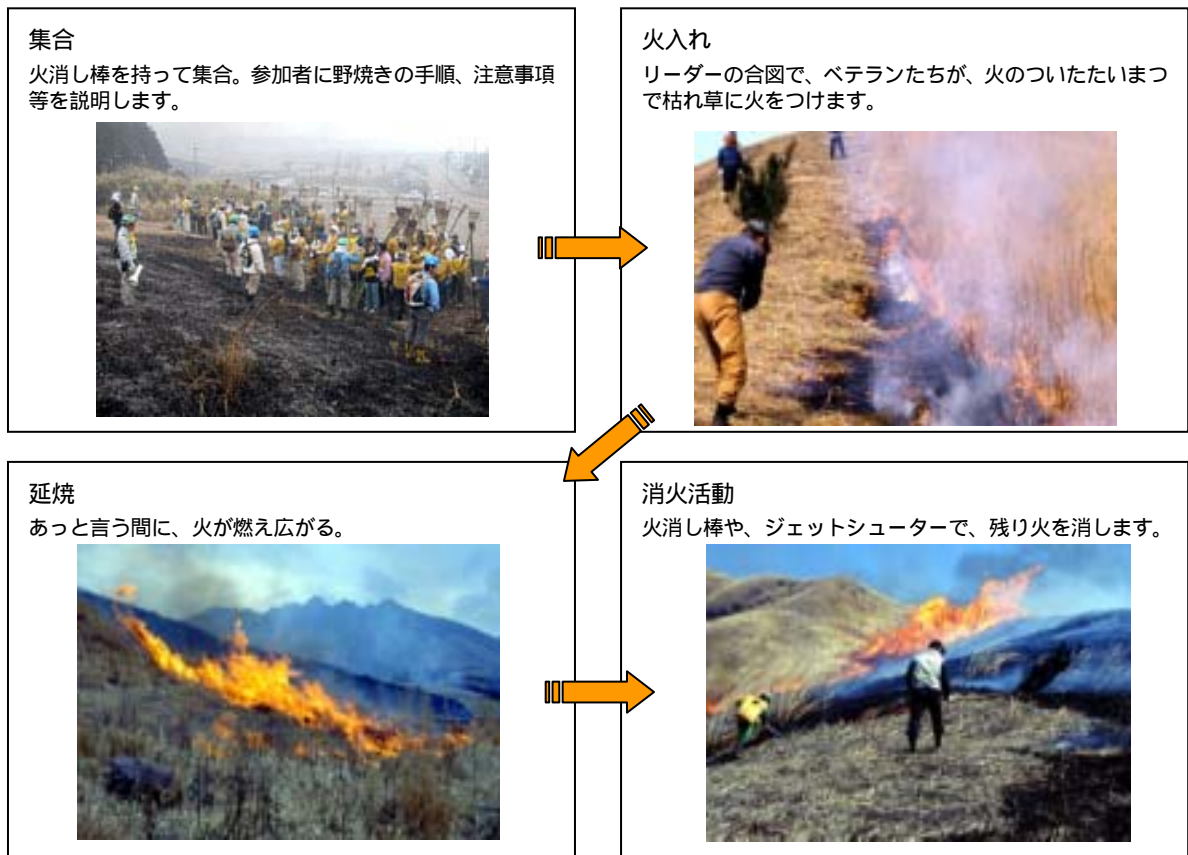
「輪地切り」からおおよそ半年後、各町村の合意と各牧野組合役員、役場とで協議がなされ、火入れ日（野焼きの日）が決定されます。そして、各戸にその日程が通達され、野焼きが行われます。野焼きは今でも大勢の人の手が必要であるため、休日を実施日とすることが多くなっています。

3) 集落の人が総出で草原に火を入れる - 野焼きは集落の人たちのチームプレー

野焼き・輪地切りは江戸時代にも行われていました。当時これらの作業は、ムラの共同作業として行われ、個人的に行うことは禁止されていました。野焼きを行う場所も決められ、実施の手順、日程を報告することが義務付けられていました。それは、藩の貴重な財源である山林に火が入らないようにするためのもので、これらの約束に反した場合は、無事野焼きが終了しても、厳重に処罰されたといわれています。

今でも野焼きは往時の原型を引き継いで集落の人が総出で実施されています。牛を飼っている人も飼っていない人も、この日は野焼きをするために草原に向かいます。それは、数多くの人手を必要とする作業であり、常に細心の注意を払わなければならないからです。その先頭にあたって指揮をとるのが、経験豊かな長老や牧野組合長とよばれる畜産農家として草原を利用している人たちのリーダーです。指揮をとる人は、着火の際に風向きを正確に読み、その後も必要に応じて作業員に的確な指示を出します。このように、野焼きはチームプレーがとても大切な作業なのです。

* 今では、野焼きに参加しない人が増えていますが、野焼きは入会権を持つ人に義務付けられている作業です。参加しない人は「^{高せん}賦銭」といわれる日当程度のお金を支払わなければならないというしくみがあるところもあります。



4) 野焼きの道具と服装

野焼きには、火をつけるためのたいまつのほか、消火作業に使う火消し棒やジェットシューターとよばれる背負い式の水のうを用意します。火消し棒は、竹とかずら、もしくはスギの枝で作られます。ジェットシューターは、水をためるバッグにハンドパイプがついたもので、水を入れると重さが20kgにもなるので、集落でも若者がこの役目に担ぎ出されるようです。

服装は、化繊のような燃えやすい素材では、飛んできた火の粉によっても火がついてしまうので、必ず燃えにくい木綿の服を着用します。

このほか、マッチも持参します。これは、突然野焼きの火が自分のほうに向かってきた場合に、向かい火を放つために使うもので、やたらに使うものではなく、最後の手段として使うものです。それでも、炎に巻き込まれそうになったら、炎が一瞬弱まった隙間を見計らって、思い切って火に飛び込み、火の向こう（焼け跡側）へ飛び超えることが、火から逃れる最後の手段なのだそうです。

火消し棒



ジェットシューター（手前）



(3) 野焼きの現状

1) 野焼きをめぐる問題

野焼きは、農畜産業を中心に、草原の草を確保する上で必要不可欠な作業です。しかし、生活様式が変化し、農畜産業に従事する人も減少、また高齢化している中、重労働でなおかつ危険を伴うこの作業に参加しない人も出てくるようになりました。また、共同体意識の低下、農業経営の構造変化による、転作による牧草畑や水田放牧、トウモロコシ飼料の増加による草需要の低下、野焼きによる事故に対する牧野組合員の心理的な不安、また野焼きに欠かせない輪地切り・輪地焼きの人手不足も要因のひとつとなっています。

そして、野焼きされずに放置される草原が増え、野焼きが行われる面積は年々減少しているのです。

2) 野焼きが行われなくなるとどうなるの？

野焼きが行われなくなると、草原での優占種であるススキ、ヤマハギが巨大化し、枯れ草の堆積量が増えます。それによって、表土に草が生えなくなり、流土や山崩れが頻繁に起きる危険性が高まってきます。

また、そのような状態のところへ飛び火すると、枯れ草の堆積物は燃焼温度が高いため、火の勢いが強まり、消火が困難になります。

このように、野焼きが行われなくなることによって、さまざまな問題が発生してくるのです。

野焼きが中止されて20年を経た草原



3) 野焼きにボランティアが登場

野焼きに携わる人が減り、野焼きを行うことが困難になりつつある中、財団法人阿蘇グリーンストック（平成7年設立）は、野焼き支援ボランティアの会を設置し、市民ボランティアによる野焼き、輪地切りの支援活動を行っています。平成17年2月28日現在、ボランティアの登録会員数は513名で、平成10年から野焼き・輪地切りに参加した延べ人数は4,533名に上ります。

最初の頃は、都会の人の手伝いは足手まといになるし危険だ、と拒否されていたようですが、同財団の努力により、初心者研修、リーダー研修を重ねた結果、今では地元農家同様の作業レベルまでになり、野焼きや輪地切り作業に欠かせない戦力となっています。受け入れる地元農家からも「人手不足が解消され、助かる」とか、「がんばるボランティアの勇姿に自分たちも刺激を受ける」という声も聞かれます。

野焼きボランティア体験談

私は以前、野焼き体験に参加させて頂いたことがあります。
その時は（阿蘇の草原の風景は素晴らしかったのですが）何よりも人の素晴らしさに感動しました。

初めての体験ということもあり、いざ草原に出て野焼きを始める段になると、燃え広がったらどうしよう、急に火が大きくなったらどうしよう、と不安になってしまったのですが、様々なテクニックを使って自在に火を操る牧野組合の方々の姿を見ているうちに、その頼もしさに不安もなくなっていったことを今でも覚えています。

私は結局作業の足手まといにならないようにするのが精一杯でしたが、皆さんにとっても親切にいただき、素敵な体験ができました。また、阿蘇に行きたいです。 / [Iさん 30歳・女性・東京在住]



（阿蘇草原再生HP掲示板 より）

2. 火の山への祈り

(1) 火山信仰の歴史

5～6世紀ごろ、阿蘇では、阿蘇君^{あそのきみ}を中心とした文化が栄えていたといわれています。阿蘇市一の宮町に残る中^{なかどおり}通古墳群からは阿蘇氏一族の繁栄を示す装飾物などが発掘されています。阿蘇君を中心としたこの共同体は、阿蘇谷^{あそだに}の開発に努めましたが、大きな噴火があると、農作物が被害にあってしまうということで、農作物が無事育つように、人々は朝な夕な火山に向かって祈りを捧げていたようです。中国で編まれた歴史書「随書倭国伝」（6世紀）には、「阿蘇山有り、故なくして火起り石は天に接するほど、人々はおそれおのき祈りをささげ祭り事を行った（原文：有阿蘇山其石無故火起接天者俗以為異因行禱祭）」と記されており、この時すでに阿蘇山への信仰があったことがわかります。

この火山信仰の中心になったのは、おそらく火口の近くにあった大きな岩ではなかったかと考えられていて、この岩が阿蘇を作った神様、健磐龍命^{たけいわたつのみこと}のご神体ともされています。また噴火口にできる池は水が増減することから神秘的な力があるということで尊ばれ、「神霊池^{しんれいけ}」として神格化されました。これは大きな磐が立っているという意味の健磐と、池の主である龍をあわせた健磐龍命という神名にもあらわれているといえます。

また、阿蘇山西巖殿寺には、「阿蘇奇瑞^{あそきずいき}記」という絵図が残っています。これは、国の政治上の大きな出来事のように前ぶれとしてとらえた神霊池の水の色や火山の煙の色、その出方、勢い等の変化を記録したものです。文永7年（1270）から建武2年（1335年）までの阿蘇の火山活動の様子を絵にし、奇瑞（よいしるし）とされる噴火のようすが描かれたもので、火山活動の様子は、大宰府をへて朝廷に知らされました。

昔の人たちが火山を神の霊の宿る所として恐れ、敬う心が阿蘇山信仰となり、健磐龍命に対する信仰と結びついていったことは容易に考えられることなのです。

（参考：阿蘇の神話と伝説）

(2)阿蘇山信仰の場「古坊中」

草千里浜くさせんりがはまを通して中岳なかだけへ向かう途中に広々とした平坦面が広がっています。この付近はかつて阿蘇山をご神体とする山岳信仰の場として栄えたところで、古坊中ふるぼうちゅうと呼ばれています。

この地における祈禱行事を司ったのは阿蘇氏でしたが、8世紀ごろからは仏教的儀式も行われるようになり、山にこもる僧侶などもでてきたと考えられています。その頃から山岳仏教も盛んになり、阿蘇山を修行の場を選ぶ行者、僧侶が増えていったようです。

このようにして阿蘇山の祈禱行事の一端を僧侶たちが担うまでに勢力を拡大していきました。その中心になったのが西巖殿寺さいがんでんじです。

その後、阿蘇氏の保護と規制を受けながら三十七坊が栄えたとされます。天正年間(1580年ごろ)、薩摩の島津軍あるいは大友氏の侵攻で焼き払われたと言われていますが、中岳なかだけの火山活動によって滅びたという説もあり、その滅亡の原因は定かではありません。

慶長5年(1600年)、加藤清正が今の阿蘇駅付近(阿蘇市黒川)に坊舎と庵室を復興し、一帯を麓坊中ふもとぼうちゅうと呼びました。しかしこれも明治初期の廃仏忌により、三十七坊は廃寺に追い込まれました。

このような紆余曲折を経て、いまなお「古坊中」という地名はその歴史的背景とともに今日まで受け継がれています。また、山上には、阿蘇山上神社と再建された西巖殿寺山上本堂が隣接して立っています。

西巖殿寺の火渡り

無病息災を祈り、信者たちが、火がくすぶる炭の上をはだして渡る神事



(3)火にまつわる行事

阿蘇の人々は、古くから野焼きひぶりしんじなどを行い、火を生活に利用する一方で、前出のように火口の火を畏れ崇めてきました。阿蘇神社の火振り神事(阿蘇市一の宮町)、西巖殿寺の火渡り(阿蘇市黒川)、霜宮火焚き神事(阿蘇市役犬原やくいんばる)など、阿蘇には火にまつわる行事が残っており、その歴史を物語っています。

火振り神事(阿蘇市一の宮町)

五穀豊穡を祈る阿蘇神社の田作り祭の神事の一つ。農業の神様が、姫神をめとる儀式。



霜宮火焚き神事(阿蘇市役犬原)

農作物を霜の害から守るため、稲が穂を出して刈り取るまでの約2ヶ月間、ご神体を火で暖める神事。

